

[研究ノート]

サイバースペースとリアルスペースの間で
——マレーシアにおけるブログの展開——

伊賀 司¹

近年、ウェブページ上で基本的には二次リソースに依存しながら、ニュースや事件を評論するブログとその書き手であるブロガーの存在が世界的に注目されつつある。アメリカでは大統領選挙や上下両院の選挙、商品開発や宣伝においてブロガーたちの影響力は無視できないものになっている。日本もその例外ではない。最近発表された調査（2007年4月）では、意外にも世界で最もブログの投稿数が多いのは日本語である²。ブログというコミュニケーション・ツールは各国によって、その受容の仕方や活用法などに差異が見られるものの、確実に現代の我々の社会に広がりつつある一潮流である。

こうした先進国のブログ利用の拡大は、マレーシアを含めた東南アジア諸国にとっても他人事ではない。去年の暮れ頃から今年に入って、マレーシアではブログとブロガーを巡る事件が急速に注目されるようになってきた。

本稿では、最近のブログを巡る動きをマレーシアのインターネットの受容状況とともに見ていくことにしたい。まずは、ブログが今年に入って注目される以前のマレーシアにおけるインターネットの受容状況について見ておこう。その際、留意すべきは、インターネットがマレーシアに受容される過程での世界的な動向とマレーシア独自の文脈の双方の点である。

マレーシアにおけるサイバースペースの展開

近年、マレーシアにおけるインターネットの普及は急速に高まっている。International Telecommunication Union (ITU)の調査によれば、2005年のマレーシアのインターネット・ユーザー数は1100万人を超えると計算されている。住人100人当たりのユーザー数は43.37人、同じく100人当たりのPCの所有台数は19.16台である。これは1999年の調査ではユーザー数が280万人、100人あたりのユーザー数が12.83人、PC所有台数が

¹ 神戸大学大学院博士課程在籍。本稿に関するコメント等を歓迎します。

² *CNET Networks*, April 5, 2007. (http://news.com/8301-10784_3-6173804-7.html) ただし、日本語でのブログは携帯電話からの投稿も多く、短い記事が多数掲載されることから見かけ以上に投稿数が多くなることがある。

8.25 台であったことを考えると近年の急速な伸びを示している³

こうした普及の急速な伸びの背景には、前首相のマハティールがマルチメディア・スーパー・コリドー (MSC) 計画に代表される IT 化を強力に推し進めたことの影響が大きいことは明らかである。97 年、マハティールは MSC 計画を成功させるうえで外資導入が不可欠と考え、外資の嫌うインターネット上の検閲を行わないことを公式に表明した。このマハティールの約束がマレーシアのサイバースペースの展開に大きな影響を与えることになる。マレーシアにおいて出版物は出版・印刷法 (PPPA) によって厳格に管理されており、PPPA の定める毎年のライセンス更新が出版業者、ジャーナリストや政治活動家にとって大きな障害となっていた。だが、マハティールが表明したインターネットの非検閲の方針は、2001 年のコミュニケーション・マルチメディア法でも明文化されるとともに、後に、レフォルマシ時代の元副首相アンワルの支援サイトの乱立や 1999 年の総選挙前に立ち上げられたマレーシアで初めてのインターネットによる政治系ニュースサイトの *Malaysiakini* の誕生、野党 PAS の党機関紙 *Harakah* がインターネット・サイト (*Harakah Daily*) を開設することなどに決定的な影響を与えたのである。

ただし、こうしたインターネットの利用法は、インターネットの潜在力を十分に活用したものではなかったことは確かである。インターネットという技術の核心は、コストを大幅に下げること、不特定多数による双方向性のコミュニケーションを実現することにある。一過性の現象で終わったレフォルマシ時代のアンワル支援サイトの乱立を除くとして、*Malaysiakini* や *Harakah Daily* は基本的に情報が送り手から一方向で流れていくものであった⁴。

この傾向はマレーシアに限らず、アメリカで 2001 年のドットコム・バブルが崩壊する前までは世界的にも類似の傾向がみられた。だが、アメリカではドットコム・バブル崩壊後は従来の枠をこえた新しい形態のサービスが提供されるようになる。Web 2.0 の総称で呼ばれる新しいサービスは双方向性を特徴とし、その代表格は、インターネットの百科事典ウィキペディアやネット上のコミュニティ・サイトであるソーシャル・ネットワーキング・サービス (SNS) である。ブログも Web 2.0 の代表的サービスの一つであるとみなすこともできよう⁵。

³ ITC ホームページ (<http://www.itu.int/ITU-D/ict/statistics>) こうした統計結果について、筆者は疑問がない訳ではない。半島部の小都市や農村を訪ねると、実感として携帯電話は普及しているものの、パソコンとなると未だ普及は進んでいないように見える。一方でクアラルンプールやペナンなどの大・中都市では、たとえ個人がパソコンを所有してなくても、職場やインターネット・カフェでパソコンに触れる機会は非常に多い。

⁴ 留意すべきは、最近、*Malaysiakini* の記事一つ一つにコメント送付欄が付けられたことであろう。ブログのように読者の意見がネット上に表示されるものではないものの、双方向性を拡大させる試みだと考えられ、興味深い。

⁵ Web 2.0 の概念はアメリカでティム・オライリー (Tim O'Reilly) が提唱した概念で、Web 2.0 に含まれるサービスについて必ずしも厳密な定義づけがなされている訳ではない。ただし、本文でも述べたように 2000 年前後を境にして、インターネットの双方向性を大き

こうした新しいインターネットの利用法は、ここ 2-3 年ほど前からブログという形でマレーシアでも散見されるようになってきた。

ブログ界の先駆者たち

マレーシアにおいて最初期にブログを活用し、政治的な評論活動を始めた一人が、ジェフ・オイ(Jeff Ooi)である。ジェフ・オイは 2003 年 1 月にブログの *Screenshots* を始めた。ジェフ・オイは後述する今年に入ってから *New Straits Times (NST)* からの提訴以外にも、当局や主流メディアとの間に様々な摩擦を生んできた。

そのうちの 하나가、2004 年 9 月から 10 月にかけて表面化した *Berita Harian (BH)* や当局との対立の表面化である。きっかけはジェフ・オイが、アブドゥラ政権の進めるイスラム・ハドハリと金権政治は水と油のように論理的には共存しないと 9 月 30 日のブログに書いたが、それに Anwar と名乗る匿名読者が、比喩として使うべきは水と油ではなく、糞尿であると意見を投稿したことである。これに *BH* がイスラムを侮辱する内容であり、ブログ管理者のジェフ・オイの管理責任を問う批判記事を一面で発表した⁶。事件は、警察が捜査に乗り出し、翌年まで続いたが、ジェフ・オイが事情聴取に協力することにより、事態は沈静化していった。

ジェフ・オイの他に注目すべきブロガーには、アヒルディン・アタン(Ahirudin Attan)がいる。彼は *Malay Mail* の元編集者であり、NSTP⁷グループでジャーナリストとして 21 年間のキャリアを持つ。アヒルディンは *Malay Mail* を退職後、自身の新たなブログとして 2006 年 2 月に *Rocky's Bru* を立ち上げ、評論活動を開始した。アヒルディンのように元ジャーナリストで有名ブロガーには他にも、元 *NST* 記者で「ジャーナリストの父 (Bapa Wartawan)」として有名なアブドゥル・サマッド・イスマイル(Abdul Samad Ismail)を父に持つヌライナ・サマッド(Nuraina A. Samad)や NSTP のグループ編集長を長く務め、90 年代にはマハティールの指導者としての神格化に貢献したカディール・ジャシン(A. Kadir Jasim)がいる。

因みに、アヒルディン、ヌライナ、カディール・ジャシンは全て NSTP グループの元ジャーナリストであり、よくて中立か、どちらかといえば現政権に批判的な立場をとることが多い。NSTP は政権と近いビジネスマンを通じて UMNO の完全な統制下にあり、メディア関係者にとっては NSTP が UMNO 系のメディア・グループ企業であることは周知の事実である。そうした NSTP の元ジャーナリストであるアヒルディンらが退職後にブログを使って、現政権に批判的なことを書く。これは大いなる皮肉であろう。

く活用したサービスの総称が Web 2.0 と呼ばれることとなった。

⁶ 'Laman web siar pandangan hina Islam Hadhari,' *Berita Harian*, Okt 2 2004.

⁷ ここで言う NSTP とは New Straits Times Press のことで、*NST* や *Malay Mail*、*BH* なども含めたグループ企業のことである。

野党の DAP の中にはブログを持っている政治家が多い。代表的なのがリム・キッシュン(Lim Kit Siang)やテレサ・コック(Teresa Kok)などである。DAP にとってブログが選挙活動の上での手段となるとともに、党員拡大のための新たな人材の供給源にもなっているという興味深い指摘もある⁸。ブログを持つ政治家は主流メディアにカバーされない野党政治家がどうしても多くなってしまふものの、与党政治家の中にも、元 BN 議員団の議長であるシャフリル・アブドゥル・サマッド(Shahrir Abdul Samad)のようにブログを持っている人物もいる。

NSTP 名誉毀損裁判とブロガー同盟の結成

ブログを巡る動きで今年に入って最も注目すべきは、NSTPの役員が起こしたジェフ・オイとアヒルディン・アタンへの名誉毀損裁判であろう。2007年1月、ジェフ・オイとアヒルディンはNSTPの役員に名誉毀損で訴えられていることを明らかにした。彼らを告訴したNSTP役員は、前グループ編集長で現グループ副議長のカリムラ・ハッサン(Kalimullah Hassan)、グループ編集長のヒシャムディン・アウン(Hishamudin Aun)、前グループ編集者のブレンダン・ペレイラ(Brendan Pereira)らである。NSTP側は、アヒルディンとジェフ・オイが2006年11月にブログで書いた内容に大きく反発している。アヒルディンらは、10月30日のNSTPでグループ編集者のブレンダン・ペレイラが書いたコラムが *Detroit Free Press* の2006年9月10日のコラムとそっくりであることを指摘した⁹。

アブドゥラ首相は、NSTP役員によるジェフ・オイらの告訴を受けて、サイバースペースでブロガーが法律上の規制を受けることを明確に示して、結果的にNSTP側を擁護する姿勢をとっている¹⁰。

裁判は始まったばかりであり、今後の行方はまだ不透明なところがある。だが、4月に入ると注目すべき動きがブロガーの中から生まれてきた。ブロガー達がリアルスペースで会合を持ち、そこでブロガー同盟(National Alliance of Bloggers)を結成したのである。会長をアヒルディン、副会長をジェフ・オイに仰ぐこの同盟は、両者の裁判をモラル面でサポートするとともに、今後もブロガーたちのネットワーク作りに大きな影響を与えようである。報道によれば、今後、リアルスペースでの結社登録も視野にいれているようである¹¹。

以上のようなNSTP役員による提訴に代表されるように、最近、政府や主流メディアの側のブログを含めたインターネットへの警戒感急速に高まっている。2006年には、国内

⁸ Joceline Tan, "Cyberspace talent search," *The Star*, November 26, 2006.

⁹ Soon Li Tsin, "Bloggers sued for defamation," *Malaysiakini*, 18 January 2007. 因みに、NSTPの剽窃疑惑はこの一件に留まらない。ブロガー側が最近指摘したところによると、2006年7月3日のペレイラのNSTPのコラムも剽窃疑惑がかけられている。ペレイラは去年の12月に「契約期間を終了して」、NSTPを退社している。

¹⁰ "Bloggers subject to same rules," *NST*, Jan 25 2007.

¹¹ Fauwaz Abdul Aziz, "Bloggers unite in face of hostility," *Malaysiakini*, April 6 2007.

治安省の副大臣がインターネット上にも PPPA を適用することを主張した¹²。今年に入って *Malaysiakini* が実際の書類のコピーを手に入れてスクープしたところによると、3月13日づけで国内治安省は主要紙の編集者たちに「要請」を行っている。「要請」は主要紙がウェブや個人のブログを引用しないように PPPA を想起させながら迫る内容で、例えば「主要紙は世論を刺激し、意図的にジャーナリズムの原則に反して、これによって安定と国家の安全を弱体化させる行為は賢明ではない」と、直接的表現こそ避けてはいるが露骨に圧力を感じさせる内容であった¹³。

このようにブログへの圧力は高まっている一方で、筆者は個人的に、政府や主流メディアの対応が「藪をつついて蛇を出す」ことにつながっている感想を持たないでもない。

サイバースペースとリアルスペースの間で

本稿ではマレーシアで現在まさに進行中の現象であるブログの展開について紹介した。アメリカや日本に比べれば、マレーシアのブログの存在は、未だ萌芽的な段階に過ぎない。

だが、近年のブログを巡る事件は、今後のマレーシア政治に大きな影響を与える可能性がある。既に見たように、興味深いのは、サイバースペースでの言論活動がリアルスペースへと波及し、裁判を引き起こすとともに、それがさらにフィードバックしてサイバースペースでの議論を巻き起こしたことであろう。最終的には、ブロガー達が同盟を結成し、役員を決め、リアルスペースでの結社登録を検討するまでに話が進んでいった。ここで見られるように、明らかにサイバースペースとリアルスペースの間の垣根はあいまいになっている。現在マレーシアで進行中の出来事はまさしく、サイバースペースとリアルスペースの間で繰り広げられている新たな現実の一端なのである¹⁴。

2007年5月19日脱稿。

¹² 伊賀司「アブドゥラ政権下のメディア」『JAMS News』36号、2006年、も参照のこと。

¹³ Tony Thien, “Don’t quote websites and blogs, media told,” *Malaysiakini*, 17 March 2007.

¹⁴ 現在、筆者はブログやインターネット上のニュースサイトも含めた主流メディア以外のオールターナティブ・メディアの動向について調査中である。